『三玉挑事抄』注釈　秋部（下）

岩坪　健

本稿は『三玉挑事抄』春部の200番から264番までを掲載する。凡例は秋部（上）と同じであるので省略する。担当者はすべて本学博士課程在学者で、以下の通りである。なお各項目末尾の（　）内には、担当者の氏名を示した。

大杉里奈、呉慧敏、風岡むつみ、加藤森平、平石岳、廣瀬薫、竹田有佳

禁中月

200にしになるひかりもあかすすむ月の花のとほその明かたの空

拾芥抄、宮城部、月華門。西謂之南殿西向門。安福校書両殿間、有此門云云。

［出典］雪玉集、二七九三番。拾芥抄、宮城部、月華門。［異同］『新編国歌大観』『拾芥抄』ナシ。

［訳］　宮中の月

西に沈む月の光もまだ見飽きず夜を明かし、美しい月華門の扉を開けると、明け方の空に月が澄んでいることだなあ。

拾芥抄、宮城部、月華門。西側で、南殿（紫宸殿）の西向にある門をいう。安福殿と校書殿の二つの殿舎の間に、この門はある云々。

［考察］「枢（とぼそ）」は扉または戸を指し、「月の花のとぼそ」は月華門を意味する。また「花の」は美称。「あかす」に「飽かず」と「明かす」、「明けがた」に「開け」を掛ける。

［参考］『拾芥抄』は寛永一九年（一六四二）版を使用。紫宸殿の東には日華門があり、月華門と対置する。

（平石岳）

201 碧

雲のうへや花のあしたの言の葉もおよはぬ月の秋のよのそら

古今序云、古しへの世丶の御門、春の花のあした、秋の月の夜ことに、さふらふ人〳〵をめして、ことにつけつ丶、歌を奉らしめたまふ。あるは花をそふとて、たよりなき所にまとひ、あるは月をおもふとて、しるへなき闇にたとれる心〳〵を見たまひ、さかしおろかなりとしろしめしけむ。

［出典］碧玉集、五一六番。古今集、仮名序、一二頁。［異同］『新編国歌大観』『古今集序抄』ナシ。

［訳］　（宮中の月）

宮中では（春の）花の咲いた朝も、雲の上にある秋の月の夜空には言葉も及ばないなあ。

古今集の序によると、昔の代々の帝王は、花の咲いた春の朝や、秋の美しい月夜ごとに、お付きの人々をお召しになって、何事かにつけて常に歌の詠出をお求めになった。またある時は思いを花に託して作歌しようと、手がかりのない場所をさまよい、ある時は月を愛でるために、不案内の地をまごつき歩いた人々の心中をご覧になり、彼らの賢愚を識別なさったのだろう。

［考察］『古今集』仮名序は歌の起源に立ち戻り、歌の理想的な姿を古代の帝王と歌の関わりから辿る箇所。当歌は春の花より、宮中から見える秋の月の美しさの方が勝ると詠む。春と秋の優劣を論議する春秋の争いは、古くは額田王の長歌（万葉集、巻一、一六番）に見られる。

［参考］当歌は「花」と「葉」が縁語で、「雲のうへ」は宮中と、月がある雲の上を掛ける。

（平石岳）

古寺月

202此ころの秋も見かてら露霜の野寺の月に一夜あかしつ

［出典］柏玉集、八六三番、一三四七番。雪玉集、四七三八番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　古寺の月

近頃の秋を見るついでに、露が結んだり霜が降りる野の寺で月を見て一夜を明かしたなあ。

［考察］出典は203番歌と同じで、当歌の第二句「秋も見がてら」は『源氏物語』の一節「秋の野も見たまひがてら」を踏まえる。

（風岡むつみ）

203こゝにてもうき人しもと月やみんをし明かたの雲の林に

榊巻云、秋の野も見たまひかてら、雲林院にまふてたまへり云々。所からに、いとゝ世中のつねなさをおほしあかしても、猶、うき人しもとそおほし出らるゝ、をし明かたの月かけに、法師はらの、あか奉るとて。

［出典］雪玉集、一二九〇番。源氏物語、賢木巻、一一六頁、一一七頁。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『承応』『湖月抄』「うき人しもとそ―うき人しもそとて」。

［訳］　（古寺の月）

ここにいても「憂き人しも」（つれない人が恋しい）と思って、月を見るのだろうか。空が明けて来るころの雲が群がっている雲林院で。

賢木巻によると、（光源氏は）秋の野辺をもごらんになりがてら、雲林院に参詣なさった云々。場所が場所とて、ひとしお世間の無常を夜通しお考えになるにつけても、やはり「うき人しもぞ」とあのつれないお方（藤壺）のことを思い出さずにはいらっしゃれないが、その明け方の月の光に照らされて、法師たちが閼伽をお供えしようとして。

［考察］『源氏物語』は、桐壺帝の崩御に伴い里下がりした藤壺と密会した光源氏が、その心を鎮めるために雲林院に参籠した箇所。光源氏の心中思惟である「うき人しもぞ」の出典は、「天の戸をおしあけ方の月見れば憂き人しもぞ恋しかりける」（新古今和歌集、恋四、一二六〇番、よみ人しらず）で、その第二句「おしあけ方の」は当歌の第四句に引用。「雲の林」は群がっている雲の有様を林に見立てていう語で、雲林院も掛ける。

［参考］『雪玉集』の歌肩に「永正九七月次」とあり、永正九年（一五一二）七月の月次（つきなみ）歌。

（風岡むつみ）

204 柏　　樵夫帰月

斧のえをくたすも有かあかなくに一夜の月に何かへるらん

王質事実、註于春部。

［出典］柏玉集、八三七番。［異同］『新編国歌大観』「あかなくに―あかなくの」。

［訳］　木こり、月夜に帰る

（ずっと眺めていて）斧の柄を腐らせるほどの時間が経ったのだろうか。まだ名残惜しいのに、この月夜になぜ木こりは帰るのだろうか。

王質の故事は、春の部に注がある。（52番歌、参照）

［考察］出典は、斧の柄が朽ちているのを見て長い年月が経っていた事に気づいた、という王質の故事。当歌は斧の柄が朽ちるほどの長い時間、月を眺めていたわけでもないのに、なぜ帰らなくてはいけないのかと名残惜しく思う気持ちを詠む。

（廣瀬薫）

205 同　樵客帰月

月のうちのかつらもをのか薪とやゆく〳〵袖のうへに見るらむ

酉陽雑俎。見于夏月註。

［出典］三玉和歌集類題、秋、樵客帰月。［異同］『三玉和歌集類題』ナシ。

［訳］　木こり、月夜に帰る

木こりは月の中にある桂も自分の薪にするつもりで、帰る道すがら（涙で濡れた）袖の上に映る月を見ているのだろうか。

酉陽雑俎。夏月の注に見える。（119番歌、参照）

［考察］出典は、月にある桂を伐り続けている男の伝説で、その故事は『万葉集』にも見られる。当歌は月の桂を高貴な女性に例え、桂の木を薪として思いを燃やし、叶わぬ恋に泣いているとも解釈できる。

（廣瀬薫）

有明月

206おもへとも命なかきは有明のかたはなからに世を尽せとや

荘子、天地篇曰、寿キ時ハ則多シ辱。

［出典］雪玉集、一一八七番。荘子、三七三頁。［異同］『新編国歌大観』『荘子』ナシ。

［訳］　有明の月

あれこれ思っても（死ねずに）寿命が長いのは、夜明けの空に残っている有明の月のように、見苦しくても長生きしろということだろうか。

荘子、天地篇によると、長生きすると恥をかくことが多い。

［考察］出典は、中国の伝説上の聖帝である堯が華に出かけた時、国境にいる隠者に、「堯が長生きするように、あるいは豊かになるように、あるいは男子が多く生まれるように祈ろう」と言われた。ところが堯は、「どれも必要ない」と答えた。引用個所は、祈る必要がない理由の一つ。

（廣瀬薫）

月前行客

207更ぬともあはれをかはす友しあらはのこりの月に猶やゆかまし

朗詠集。佳人尽ク飾ニ於晨ニ粧ヲ。魏ニ宮ニ鐘ニ動ク。遊子猶ヲ行ニク於残ニ月ニ。函谷ニ鶏ニ鳴ク。

［出典］雪玉集、二七九六番。和漢朗詠集、巻下、暁、四一六番。［異同］『新編国歌大観』『朗詠集註』ナシ。

［訳］　月下の旅人

たとえ夜が更けても、心を通わす友がいれば、（旅中の孟嘗君のように）やはり残月のもとで会いに行くだろうか。

和漢朗詠集。宮女たちはみな朝のお化粧をして美しくよそおっている。今しがた、明け方を告げる魏宮の鐘が鳴ったからだ。旅中にある孟嘗君は残月の下で歩き続けている。それは幸いにも鶏が暁の刻を告げて鳴いた（ために関所の門が開いた）からだ。

［考察］函谷関は秦が東方からの侵入に備えた関所で、絶壁に囲まれた難所。夜は閉ざされ、鶏が鳴いてから通行人を通す決まりがあったことから、夜に孟嘗君が追手から逃げてこの関を通るため、彼の食客の一人が鶏の鳴き真似をして欺いたとする故事が『史記』「孟嘗君伝」に見られる。

（加藤森平）

月似弓

208とは丶やなまゆみ月弓月影はいかなるしなか有明の空

梁塵秘抄、神楽歌。弓といへはしな丶き物を梓弓まゆみ月弓品こそ有らし

［出典］雪玉集、一三三七番。梁塵愚案抄、巻上、神楽、弓。［異同］『新編国歌大観』『梁塵愚案抄』ナシ。

［訳］　月、弓に似る

問いたいものだなあ。有明の空に見えている月影は真弓か槻弓か、どのような品種の弓（に似ているの）だろう

か。

梁塵秘抄、神楽歌。

弓といえば、品種による差がないものよ。梓弓だの、真弓だの槻弓だのと、種々あるらしい。

［考察］神楽歌によると、弓には多くの種類があるが優劣の差はない、とする。それでも今見ている月は、どのような弓に似ているか問いたい、と当歌は詠む。「梁塵秘抄、神楽歌」とあるが、現存する後白河院編『梁塵秘抄』には神楽歌は含まれていない。この「梁塵秘抄」は巻末の引用書目にある『梁塵愚案抄』を指すと考えられる。『梁塵愚案抄』は一条兼良が著わした神楽歌と催馬楽の注釈書で、康正元年（一四五五）以前に成立。元禄二年（一六八九）版を使用。

［参考］神楽歌の結句「品こそ有らし」は重種本系の本文。鍋島家本（『新編日本古典文学全集』収録）では「品もものとめず」。

（加藤森平）

月似鏡

209 山とりも音にやたてまします鏡それかと月のすめる尾上に

事文類聚後集、四十二巻曰、昔、罽賓王、結二置ヲ峻卯之山一ニ、穫二一ノ鸞鳥ヲ一。王甚タ愛シ之ヲ、欲二其ノ鳴ンコトヲ一而不レ能レ致スコト。乃シ飾ルニ以二金樊一、饗スルハ以二珍羞ヲ一対シテ之ニ逾レ戚ム。三年マテ不レ鳴、其ノ夫人ノ曰、「嘗テ聞ク鳥見二其ノ類ヲ一而後鳴ク。何ゾ不二懸テ鏡ヲ映一」。王従二其ノ意一ニ鸞覩レテ形ヲ悲レ鳴ノ哀シム。

［出典］雪玉集、一三三三番。事文類聚後集、巻四二、鸞鳥詩序。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『和刻古今事文類聚』「何ッ不二懸レテ鏡ヲ映一。―何ッ不二懸レテ鏡ヲ以テ映一セ也。」。

［訳］　月、鏡に似る

山鳥も声を立てて鳴くだろうか。山頂で真澄鏡のように澄んでいる月に（向かって）。

事文類聚後集、四十二巻によると、昔、罽賓の王が峻卯の山に網を仕掛けて一羽の鸞鳥を獲った。王はその鳥をとても愛し、その鸞鳥の声を聞こうとしたが鳴かせられなかった。そこで金の鳥籠を飾ったり、珍しい食べ物を食べさせたりして、その鳥をますます可愛がった。三年経っても鳴かず、王の夫人が、「鳥は同じ種類の鳥を見ると後に鳴く、とかつて聞いたことがある。どうして鏡を懸けて映さないのか」と言った。王は言われたことに従い（鸞鳥に鏡を見せると）、鸞鳥は自分の姿を見て悲鳴し悲しんだ。

［考察］『事文類聚』は宋の祝穆が編纂した類書。前集六〇巻、後集五〇巻、続集二八巻、別集三二巻。淳祐六年（一二四六）成立。『藝文類聚』『初学記』の体裁にならい、古今の群書の要語・事実・詩文を集めて分類したもの。罽賓は北インドのカシミール地方もしくはガンダーラ地方に在ったとされる国。当歌は『事文類聚』の故事を踏まえて、鏡のように澄んでいる月を山鳥は鏡と見まちがえて鳴くだろうかと詠む。

［参考］『和刻古今事文類聚』は寛文六年（一六六六）版を使用。「山鳥、友を恋ひて、鏡を見すれば、なぐさむらむ、心わかう、いとあはれなり。」（『枕草子』三九段「鳥は」）。

（大杉里奈）

月前鐘

210 此ころの月に夢みる里はあらしねよとのかねは声をたゝなん

小学、善行篇。至二人一定一鐘二然一後二帰レ寝二云云。

万葉集、巻四。皆人乎宿与殿金者打奈礼杼君乎之念者寝不勝鴨

［出典］雪玉集、一三四〇番。小学、善行第六、四六二頁。万葉集、巻四、六〇七番。

［異同］『新編国歌大観』『小学』ナシ。『万葉集』（寛永版）「打奈礼杼―打礼杼」。

［訳］　月の前の鐘

近頃の（美しい）月では、（月見で夜更かしして）夢を見る里はないだろう。寝よと合図する鐘は鳴ってほしくないなあ。

小学、善行編。亥の刻の鐘が鳴ってから寝室に帰る云々。

万葉集、巻四。皆の者寝よと合図する鐘は鳴っているが、あなたのことを思うと眠れないなあ。

［考察］『小学』は、南宋の朱熹の弟子にあたる劉子澄の編。古今の書から教学の要旨や修養の方法など、小学教育に関する部分を抄録したもの。『万葉集』の第二句「寝よとの鐘」は、晨朝・日中・日没・初夜・中夜・後夜の六回に陰陽寮で鳴らす鐘の一つで、午後七時から八時頃に打ち鳴らす鐘。当歌の結句「声をたたなん」は「立たなん」（声を立ててほしい）ではなく、「断たなん」（声を絶ってほしい）と解釈する。

（大杉里奈）

211 柏

雲にあふあかつき月にもれ出てひとりくまなきかねの声哉

古今序。まへにしるし侍る。

［出典］柏玉集、九一九番。古今和歌集、仮名序、二七頁。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　（月の前の鐘）

夜明け前に雲に出会って隠れた月から漏れ出るのは、澄んで聞こえる鐘の音だけだなあ。

古今和歌集、仮名序。前に記しています。（57番歌、参照）

［考察］古今和歌集の仮名序の一節「秋の月をみるに暁の雲にあへるがごとし」を踏まえる。

（呉慧敏）

月前枕

212 同 月にもやみる心地せん三の嶋十の洲をもつけのまくらに

開元遺事曰、亀茲国進レ枕ヲ。其ノ色若二瑪瑙一、温潤如レ玉、製作甚タ工ナリ。枕シテ之ヲ而寐ル時ハ則十洲三嶋尽ク在二夢中一。帝因テ号ス遊仙ノ枕ト。

［出典］柏玉集、九一八番。開元天宝遺事、巻一、遊仙枕。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『開元天宝遺事』「進枕—進奉枕一枚」「若—如」「温潤—温温」「製作甚工—其製作甚樸素」「枕之而寐—若枕之」「十洲三嶋—十洲三島四海五湖」「夢中—夢中所見」「号—立名為」。

［訳］　月の前の枕

（仙境である）三嶋と十洲（の在りか）を告げる柘植（つげ）の枕で（眠ると）、月のもとで（それらを夢の中で）見るような心地がするだろうか。

開元遺事によると、亀茲国から枕が献上された。その枕の色は瑪瑙のようであり、温潤さは玉のようであり、製作は甚だ巧みである。これを枕にして寝ると、十洲三島はすべて夢の中に現われる。よって帝は（その枕

を）遊仙枕と名づけた。

［考察］当歌の結句「つげ」は「告げ」と「柘植」を掛ける。

［参考］『開元天宝遺事』は唐の開元・天宝時代（七一三～七五六）における、宮中瑣事および宮廷内外の風情習俗を記したもの。寛永一六年（一六三九）版を使用。その本文では「後賜与楊国忠」と続き、楊貴妃の従兄弟にあたり安禄山の乱で誅殺された楊国忠に下賜された。また、五山僧の月船寿桂（生没一四六〇～一五三三年）には、「遊仙枕」を題にした漢詩「一枕仙遊青書長。十洲三島黒甜郷。明皇未識神山路。只愛春風睡海棠」がある。

（呉慧敏）

月前蛩

213 柏きり〳〵すをのか宿りにあらしてもかへの隙もる月をたにみん

［出典］柏玉集、九二九番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　月下の蛩（きりぎりす）

きりぎりすよ、（ここが）自分の住居ではなく荒れていても、せめて壁の隙から漏れる月を見るがよい。

［考察］出典は214番歌、参照。「あらし」に「あらじ」と「荒らし」を掛ける。

（竹田有佳）

秋歌中

214 かへの底もさそな雨夜の蛩ぬれて鳴よるともしひの影

月令曰、季夏之月律在林鐘、温風始至、蟋蟀居壁。

［出典］雪玉集、三七九四番。礼記、上巻、二四六頁。
［異同］『新編国歌大観』ナシ。『礼記』「律在二林鐘一——律中二林鐘一」。
［訳］　秋歌の中
　雨が降る夜、壁の奥もさぞかし濡れているのだろう。灯火に鳴きながら近づくきりぎりすが濡れているからなあ。
　月令によると、季夏の月（六月）の律は林鐘にあり、涼風が吹きそめ、蟋蟀が壁を這う。
［考察］「月令」は『礼記』の一篇で、一年の暦や行事について記す。「林鐘」は中国音楽の十二律の一つで、八番目の音を指す。
［参考］『礼記』の本文異同には寛文四年（一六六四）版『礼記集説』を使用。

（竹田有佳）

水郷月

215 柏 はる〳〵と月に見わたすうちはしの絶まを雲におもふ空哉

　浮舟巻。宇治はしのはる〳〵と見わたさるゝに、柴つみふねの所〳〵に行ちかひたるなと云々。
［出典］柏玉集、八九二番。源氏物語、浮舟巻、一四五頁。［異同］『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。
［訳］　水郷の月
　月の光に照らされ、はるかに見わたされる宇治橋の絶え間が、（月がのぞく）雲の絶え間に重ねられる空だなあ。
　浮舟の巻。宇治橋がはるかに見わたされるところに、柴を積んだ舟があちこちで行き交っているなど云々。
［考察］『源氏物語』は、久しぶりに宇治に訪れた薫が、浮舟の大人びたさまを好ましく思い、京に迎える準備が進ん

でいることを伝えたが、匂宮との秘事を持つ浮舟が泣きだしたことにとまどい、外の景色を眺めている場面。

（平石岳）

社頭月

216同 秋の霜こゝに置ける光をも月にそみつるふるの神かき

神代巻曰、其断レ蛇ヲ剣、号テ曰二蛇ノ之麁正一。此、今在二石上一也云云。

朗詠集、順。雄一剣在レ腰抜クトキハ則秋ノ霜三一尺、雌黄自レ口吟スレハ亦寒玉一一声。

［出典］柏玉集、八六一番・二二五二番。雪玉集、四五四八番。日本書紀、神代巻、九六頁。和漢朗詠集、下、将軍、六八六番。

［異同］『新編国歌大観』「月にそみつる—月にはうつる」（柏玉集、八六一番）。『日本書紀』『和漢朗詠集註』ナシ。

［訳］　社の前の月

布留の社（石上神宮）の垣根におりた秋の霜が、月の光に照らされ輝いている。それはまるで当社に祭られている、秋霜にも例えられる霊剣「蛇之麁正」が輝いているかのように見えるなあ。

神代の巻によると、（素戔嗚尊が）八岐大蛇を斬ったその剣を、名付けて「蛇之麁正」という。これは今、石上神宮に安置されている云々。

和漢朗詠集、源順。雄剣のような三尺もある名剣を腰に佩し、抜けば秋の霜のように鋭い光を放つ。文字消しに使われた雌黄を口に含んだかのように、充分に推敲された美しい文章を吟じると、まるで澄んだ玉が一声震えるように響く。

［考察］『日本書紀』は八岐大蛇退治の場面で、このとき大蛇の体内から出てきたのが草薙剣（くさなぎのつるぎ）。『和漢朗詠集』は、藤原伊尹が文武両道に優れていることを称えたもの。「雄剣」は中国春秋時代の干将がつくったとされる雌雄二剣のひとつ。「秋霜」は刀剣の比喩。「雌黄」は樹脂の一種で、古代中国で文字消しに使用。「寒玉」は清らかな容貌、声、水、月などの比喩。和歌の「置ける」は、霜が降りることと、剣を据え置くことを意味する。

［参考］『日本書紀』の本文異同には寛文九年（一六六九）版を使用。

（平石岳）

月前神祇

217秋の月うつりてすむも石清水むかしの袖のひかりをそ思ふ

神社考引二本朝僧史一曰、世二言、教ヵ所レ見太一神ノ本一身於レ是弥陀観音勢至ノ三一像現二袈裟ノ上一云云。

又見于続故事談、四巻。

［出典］雪玉集、一三六二番。本朝神社考、一。続古事談、四―一。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『本朝神社考』「教見太神―教見大神」。

［訳］　月の前の神祇

秋の月が岩の間から湧き出る水に映り澄んでいるにつけても、昔、僧侶の袖に映った石清水八幡宮の後光を思うことだなあ。

本朝神社考が引く本朝僧史によると、世間では、教（という僧侶）が見たところによると、八幡神の本来の姿が、ここにおいて阿弥陀如来・観音菩薩・勢至菩薩の三像として袈裟の上に現われた、と言われている云々。

また、続古事談の巻四に見える。

［考察］当歌の第三句「石清水」は、普通名詞（岩の間から湧き出る水）と固有名詞（石清水八幡宮）を掛ける。第四句「むかしの袖」は『本朝神社考』などに見える説話で、八幡神の本来の姿は阿弥陀如来・観音菩薩・勢至菩薩の三尊であり、その姿が袈裟の袖の上に現われたという話を踏まえる。その僧の名前を『本朝神社考』では「教」、『続古事談』では「行教」とする。

［参考］『本朝神社考』は林羅山の著作で、諸国の神社の源流を考証して神仏習合を非難し、神儒合一を唱えたもの。本文異同には正保二年（一六四五）版を使用。

（廣瀬薫）

218 秋の水すめらは何をあら磯の月にそなれてうたふ舟人　柏

釣夫歌月

文選、漁父辞。漁父莞尓而笑テ鼓レ枻ヲ而去ル。乃歌テ曰、「滄浪ノ之水清メラハ兮可ニ以テ濯二吾カ纓ヲ一。滄浪ノ之水濁ラハ兮可ニ以濯二吾カ足ヲ一」。

［出典］柏玉集、九一一番。雪玉集、一五三四番。文選、文章篇上、七〇頁。

［異同］『新編国歌大観』「釣夫歌月―漁父棹月（柏玉集）―歌題ナシ（雪玉集）」。『文選』ナシ。

［訳］　魚釣りの男性、月に歌う

秋の水が澄んでいるならば何を洗おうかと、荒波にも慣れて、岩の多い海岸で月に歌う舟人だなあ。

文選、漁夫の辞。漁夫はにっこりと笑い、櫂を音高く漕ぎながら去って行った。そして、歌って言うには、

「漢水の下流の水が清らかに澄んでいる時は、その水で私の冠の紐を洗うことができよう。漢水の下流の水が汚く濁っているときは、その水で私の汚れた足を洗うことができよう。」と。

［考察］出典は屈原の「漁夫」。世の清濁を川の清濁にたとえて、世に正道が行われていれば宮廷に出仕し、世が乱れていれば官を辞すことを歌う。当歌の「あら磯」に「洗い」を掛ける。

（廣瀬薫）

臨水待月

219 同 水に近きうてなのうへに待出て月は手にとる光とやみん

宋蘇鱗詩。近レ水ニ楼一台ハ先ッ得レ月ヲ云云。見于萬姓統譜。

［出典］柏玉集、八二五番。萬姓統譜、巻一二、蘇鱗。

［異同］『新編国歌大観』「臨水待月―谷月」。『萬姓統譜』ナシ。

［訳］　水辺に臨み月を待つ

水辺に近い高殿の上で月が出るのを待っていると、月は手に取れる光のように見えるだろうか。

宋蘇鱗の詩。水辺に立つ楼台では、他所よりも先に月が見られる云々。萬姓統譜に見える。

［参考］『万姓統譜』は明の淩廸知の撰、百四十六巻。万姓を統括した系譜という意味で、上古から明の中頃までの人名を、二十一史の列伝や通志・統志・郡邑志などの書中から抜抄したもの。

（加藤森平）

秋

布引滝

220 柏
くれゆかはいさ此山に待出ん月のひかりも布引の滝

いせ物語。いさ、この山のかみにありといふぬの引の瀧、見にのほらんといひて。

［出典］柏玉集、八二〇番。伊勢物語、八七段。［異同］『新編国歌大観』『伊勢物語拾穂抄』ナシ。

［訳］　秋の布引の滝

日が暮れていくならば、さあ、この山の上にある布引の滝で、月が出るのを待とう。月の光も布引の滝（のように降り注ぐだろう）。

伊勢物語。「さあ、この山の上にあるという布引の滝を見に登ろう」と言って。

［考察］『伊勢物語』は、男が有名な滝を見に登山した話。布引の滝は六甲山の南側、神戸市を流れる生田川上流の滝。

［参考］「ぬのびきの滝とききしは雲ゐより月の光のおつるなりけり」（出観集、四一九番、月映滝水）、「山かぜに雲のしがらみよわからじ月さへおつる布曳のたき」（寂蓮法師集、三四三番。津の国のあし屋といふ所にしほゆあみける時、ぬのびきの滝見にまかりて、月の出づるまでありける）。

（加藤森平）

秋声

221 おもひわく身にこそとまれ秋の声木のまに有と誰かいひけん

［出典］雪玉集、一四九五番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　秋の声

秋の声は違いが分かるわが身に留まるのに、秋の声は木の間にあると、誰が言ったのだろうか。

［考察］222番歌の出典を踏まえて、秋の訪れは木の間ではなく、雨音などと枝の鳴る音とを聞き分けられるわが身に留まると詠む。

［参考］「いつとても月はかくこそあれとて、思ひわかざらむ人は、無下に心憂かるべき事なり。」（徒然草、二一二段）では、秋の月をほかの季節の月と区別する。

（大杉里奈）

222 柏

たち出てしるへき秋の声ならし只月ほしの深きよの空

秋声賦曰、「汝出テ視レヨ之ヲ」。童子ノ曰、「星月皎潔トシテ明河在レ天ニ、四ニ無二人声一々ハ在二樹間一」。

［出典］柏玉集、九四七番。古文真宝後集、四三頁。［異同］『新編国歌大観』『古文真宝後集』ナシ。

［訳］（秋の声）

外に出て知ることができる秋の声だなあ。（雨音ではなく）ただ月や星が輝く夜更けの空に（木の枝が鳴っているのだなあ）。

秋声賦によると、「お前、家の外に出て調べて見よ」。童子は言った。「星や月が白く輝いて清らかで、天の川は空にあり、あたりには人声もなく、その音は樹の枝の間に鳴っている」と。

［考察］「秋声賦」は歐陽永叔の作で、風雨や人馬の音に聞こえたのは木の枝の鳴る音だと分かり、それを秋の声と捉えて慨嘆した賦。

［参考］本文異同には元文五年（一七四〇）版『魁本大字諸儒箋解古文真宝後集』巻上を使用。

（大杉里奈）

秋関

223と、むともかへりなれぬる道しあれは関のかためや秋になからん

朗詠集。留春不用関城固。

［出典］雪玉集、一四八九番。和漢朗詠集、上、春、三月尽、五五番。

［異同］『新編国歌大観』『和漢朗詠集註』ナシ。

［訳］　秋の関所

（過ぎゆく秋を）留めようとしても帰り慣れた道があるので、関所の固めは秋には（役に立た）ないだろうか。

和漢朗詠集。過ぎゆく春を引きとめるのに、関所や城門の固めは何の役にも立たないことだ。

（大杉里奈）

秋書

224天とふや鳥のなかにも鳥の跡を秋来る雁にいかてつけゝん

淮南子。蒼頡、始視鳥跡之文、造書契云云。

漢書。蘇武伝曰、常一恵請二其ノ守ル者一ニ、与一ニ俱ニ得三夜見二漢一使一、具ニ自陳レ道。教レ使一者ヲ謂テ二単于一ニ言ハ、「天子射二上一林ノ中一ニ得二雁ノ足一ニ有レ係二帛書一、言ク武等在リ二某沢ノ中一ニ」。使一者大一ニ喜テ如二恵カ語一以譲ムル単一于一ヲ。単一于視テ左右一ヲ而驚ク。謝シテ二漢一使一ヲ曰、「武等実ニ在ラ」云々。

［出典］雪玉集、一四九三番。淮南鴻烈解、巻八、本経訓。漢書、評林巻五四、李広蘇建伝第二四。

［異同］『新編国歌大観』『淮南鴻烈解』ナシ。『和刻本正史　漢書（二）』「謂単于―謂単于」「単于単于―単于単于」。

［訳］　秋の手紙

空を飛ぶ鳥の中でも秋に渡ってくる雁（の足）に、どのようにして文字（が書かれた手紙）を付けようか。

淮南子。蒼頡が初めて鳥の足跡の文様を見て、文字を作った云々。

漢書。蘇武伝によると、常恵はその看守に請い、その者と一緒に夜、漢の使者に会い、みずからつぶさに事情を述べた。そして使者から単于に、「天子が上林苑内で射猟して得た雁の足に帛書が結んであり、それには、武らは某の沢中にいると書かれていた」と言うように教えた。使者は大いに喜び、常恵に教えられた通りに言って単于を責めた。単于は左右の者を見て驚き、漢の使者に詫び、「武らは、実は生きている」と言った云々。

［考察］蒼頡が鳥の足跡を見て文字を創作したという伝承から、「鳥の跡」は文字や筆跡を意味する。また、蘇武の故事により、雁は手紙を届けるとされた。

（呉慧敏）

秋祝

225よもの国たへぬ田面も更に今年有秋としるしつくらし

江次第。不堪田申文云不堪国云云。大弁巻レ紙染レ筆、上―卿ノ曰、「諸―国申当年不堪佃田事」云云。

［出典］雪玉集、一五〇六番。江家次第、巻第九、九月、不堪佃田申文。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『江家次第』（神道大系）「不堪田申文云不堪国云云―ナシ」。

［訳］　秋の祝い

四方の国は耕作不能だった田地も、新たに今では穀物がよく実る秋だと記されることだろう。

江家次第。不堪田の申文によると、不堪国云々。大弁は紙を巻き筆を染め、上卿は、「諸国、当年の不堪佃田のことを申す」と言う云々。

［考察］当歌は、凶作だった田地も稲が実り、朝廷に豊作の年と申請できると祝う。第四句の「年」は古代、稲作により年の区切りを考えたことから、穀物、特に稲、また稲が実ることを意味する。

［参考］「不堪佃田」とは、洪水などにより耕作不能となった田地。荒廃田、荒田ともいう。平安時代には毎年九月七日に、諸国から当年の不堪佃田を中央に報告させるという不堪田奏が行われ、その報告を不堪佃田申文という。「上卿（しやうけい）」は宮中の公事において、首席者として臨時に任じられた者で、大臣や大・中納言の中から選ばれた。

（呉慧敏）

秋神祇

226秋をへて染こそまされ立田山紅葉もあかぬ神やすむらん

神名帳曰、大和国平群郡、龍田ニ坐天御柱、国御柱、神社二座、龍田比古、龍田比女、神社二座。

［出典］雪玉集、一五〇二番。［異同］『新編国歌大観』「紅葉も―もみぢに」。『延喜式』巻九（国史大系）ナシ。

［訳］　秋の神祇

秋を経過して、ますます龍田山は色づいたなあ。（並の）紅葉には満足しない神が住んでいるのだろうか。

神名帳によると、大和の国（奈良県）の平群郡（へぐり）の龍田に、天御柱と国御柱の神社が二座、龍田比古と龍田比女の神社が二座あらせられる。

［考察］「神名帳」とは神社とその祭神の名を記す帳簿で、特に「延喜神名式」（延喜神名帳）を指すことが多い。また「座」は祭神、仏像などの数を数えるのに用いる接尾辞。当歌は、龍田山が更に紅葉したのは、その山の神である龍田姫が並の紅色では不満なのかと詠む。

（竹田有佳）

秋歌中

227朝ほらけ露のかゝれるくものゐは只しらきぬのつゝむ春かな

いせ物語云、其滝、物よりことなり、長さ二十丈、ひろさ五丈はかりなる石のおもてに、しらきぬに岩をつゝめらんやうになん有ける。

［出典］雪玉集、四三九三番。伊勢物語、八七段。

［異同］『新編国歌大観』「つつむ春かな―つつむ木木かな」。『伊勢物語拾穂抄』ナシ。

［訳］　秋歌の中

明け方に露が掛かっている蜘蛛の巣は、まるで白絹（のような水）に包まれ（濡れ）ている春のようだなあ。

伊勢物語によると、その滝はほかの滝とは異なり、長さ二十丈、広さ五丈ほどの石の表面に、まるで白絹で岩を包んだよう（に水が流れ落ちているの）であった。

［考察］『伊勢物語』は、男が布引の滝（220番歌、参照）を見物して和歌を詠む話。当歌は、秋の朝露が掛かった蜘蛛の巣を、春雨に濡れたようだと詠む。

（竹田有佳）

228小鳥つくる枝も色〳〵かり衣花を折たる野へのかへるさ

松風の巻。小鳥しるしはかりひきつけさせたる荻の枝なと、つとにしてまゐれり。

［出典］雪玉集、三七九六番。源氏物語、松風巻、四一八頁。

［異同］『新編国歌大観』「秋歌中―秋二十首」。『承応』『湖月抄』ナシ。

［訳］（秋歌の中）

小鳥を付けた枝（の葉）も狩衣のように色とりどりで、華やかな衣装を着て、野辺で花を手折って帰るところだなあ。

松風の巻。（若殿たちは）獲物の小鳥をほんのしるしばかり結びつけた荻の枝などを、みやげにして参上した。

［考察］『源氏物語』は源氏やその取り巻きの人々が、桂の院で饗応をしていると、野宿までしたのに狩で大物が取れなかった若殿たちが、小鳥を荻の枝に結び付けて桂の院に参上した場面。当歌の「枝も色々」は枝の紅葉、「色々狩衣」は色とりどりの狩衣を表わし、「花を折る」は衣装を華やかにするという意味もある。

（平石岳）

秋山家

229露もらぬ岩やのおくも尋ねはや身はかはほりの何ならぬ世に

円機活法、石洞ノ部ニ曰、李太伯、「余聞荊―州ノ玉泉寺。近清溪諸山、山―洞往―々ニ有ニ乳―窟一。々―中ニ多玉泉交―流ス。有ニ白蝙蝠一。如レ鴉。千―載ノ之後躰如ニ白―雪一。蓋シ飲乳―水ヲ而長―生ス也」。

［出典］雪玉集、四二三六番。円機活法、巻四、地理門、石洞、乳窟。

［異同］『新編国歌大観』「秋山家―山家」。『円機活法』「李太伯―李太白」「玉泉寺―上泉寺」。

［訳］　秋の山中の家

（長命の蝙蝠がいるという）露がまったく漏れない岩窟の奥も訪ねてみたいものだ。わが身は蝙蝠（のように日陰者）で、取るに足りない世の中なのだから。

円機活法、石洞の部によると、李白は、「私は荊州の玉泉寺について、このように聞いている。近くに清らかな谷や山々があり、山の洞にはあちこちに鍾乳窟がある。洞窟の中には美しい泉が多く交わり流れている。白い蝙蝠がいて、（大きさは）鴉ぐらいもある。（蝙蝠は）千歳になると、体は白雪のようになる。思うに、鍾乳窟の水を飲むと長生きするのであろう」という。

［考察］当歌は「露」に副詞の「つゆ」を掛け、厭世観を詠む。

［参考］出典は李白の詩「答三族姪僧中孚贈二玉泉仙人掌茶一」の序の一節で、『李白集』下、巻十八（続国訳漢文大成『李白全詩集』3）にも収録。

（平石岳）

駅路鹿

230こゝろなきむまやのおさもうき秋におとろく程のさほしかの声

大鏡、第二、菅家。駅ノ長莫レ驚クコトヲ時ノ変ヲ改、一ニ栄一ニ落是レ春ニ秋。

［出典］雪玉集、七八〇九番。大鏡、七六頁。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『大鏡』（整版）「駅長莫驚―騎長無驚」。

［訳］　街道の鹿

風流心のない宿駅の長も、物憂い秋に気づかされるほどの雄鹿の鳴き声であるなあ。

大鏡、第二、菅原道真。駅の長よ、驚くことはない。時勢が変わり、今や私が配流の身となることを。春に花が咲き秋に落ち葉が落ちるのは自然の摂理であり、人の世の栄枯盛衰も同じなのだから。

［考察］「小牡鹿（さをしか）」が妻を求めて鳴く様子は、和歌によく詠まれる。『大鏡』は、菅原道真が藤原時平の陰謀により左遷された際、それを嘆く明石の駅の長に対して道真が作った漢詩。「駅（うまや）」は古代の交通用の施設で、街道などの要所に旅人のため馬や人足を備え、宿舎も設けていた。

［参考］『大鏡』の版本には整版のほか慶長・元和年間（一五九六～一六二四）ごろの古活字版があり、引用個所は古活字版では第一巻、整版では第二巻に収められている。

（廣瀬薫）

秋窓鹿

231ぬれて行山路もさそな夜の雨の窓うつ声にをしか鳴也

白氏文集。蕭々タル暗雨打ッ窓ヲ声。

［出典］雪玉集、六八一三番。白氏文集、巻三、上陽人。［異同］『新編国歌大観』『白氏文集』ナシ。

［訳］　秋の窓の鹿

雨に濡れて行く山道もさぞかし、夜の雨が窓をたたく雨音に交じり、牡鹿が鳴いているようだなあ。

白氏文集。窓をたたく夜雨の音が淋しく聞こえる。

［考察］出典の「上陽人」は、玄宗皇帝の治世に宮中に上がったが、楊貴妃により宮中の上陽宮に幽閉され続けて老いたことを嘆いた詩。引用部分は上陽宮での寂しい暮らしを歌った個所。当歌の妻を求め寂しくて夜に鳴く牡鹿に、上陽宮の老婆の姿が重なる。

（廣瀬薫）

霧

232 柏山ふかみ霧分出んかへるさも暮はてけりな日くらしの声

夕霧の巻。日いりかたになり行に、空のけしきもあはれに霧わたりて、山の陰はをくらき心地するに、日くらし鳴しきりて云々。中略。霧の只この軒のもとまて立わたれは、「まかてんかたも見えすなり行は、いかゝすへき」とて云々。

［出典］柏玉集、七八七番。源氏物語、夕霧巻、四〇一頁、四〇三頁。

［異同］『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。

［訳］　霧

山奥にいるので、霧をかき分けて出ようとしたが、帰る間にも日はすっかり暮れてしまったなあ。ひぐらしの鳴き声（が聞こえるよ）。

夕霧の巻。日も入り方となるにつれて、空の風情もしみじみと思いをそそるように霧が一面に立ちこめて、山の陰は薄暗く感じられる折から、蜩（ひぐらし）がしきりに鳴いて云々。中略。霧がすぐこの軒下まで立ちこめてくるので、「お暇（いとま）をして帰る道も見えなくなってゆくが、どうしたものか」と（夕霧は）言って云々。

［考察］『源氏物語』は小野の里に籠った落葉の宮を夕霧が訪問して、霧が深いので帰れなくなったと言う場面。ひぐらしは蝉の一種で、カナカナと高い金属音の哀調を帯びた声で鳴く。梅雨の頃から初秋にかけて朝や夕方に鳴くが、和歌では「日暮らし」に掛けて秋の日暮れ時に詠まれる。

（加藤森平）

河霧

233道しあれな霧にまよひし其かみの跡をしるへのかもの川波

本朝神社考引テ寛平御記ヲ曰、宇多帝潜竜ノ時号王侍従、放レ鷹ヲ狩リシ玉フ于賀茂ノ辺ニ。俄ニ天陰霧降テ、東西迷レ路ニ、帝臥二藪中一ニ、憂恐レ玉フコトヲ之甚タシ。有二一翁一、来告テ曰、「吾ハ此ノ辺ノ老翁也。春ハ既ニ有レ祭、冬未タ有レ祭。願ハ賜二冬ノ祭一ヲ」。帝ノ心為二賀茂ノ明神一ト也。因テ答テ曰、「吾カ力ノ非レ所レ及。宜レ被レ奏二請于内一」。翁カ曰、「知二其ノ力之所レ可レ及。願クハ自重トシテ而勿レ軽矣」。言已テ不レ見、帝大怪レ之ヲ。未レタ幾、仁和三年八月廿六日、立テ為二皇太子一、即日即二天皇ノ位一ニ。於レ是信二神ノ言一ヲ而寛平之年十一月廿一日、始行二賀茂臨時ノ祭一ヲ云云。

［出典］雪玉集、四五五七番。本朝神社考、巻一、賀茂。

［異同］『新編国歌大観』「あれな―あれば」。『本朝神社考』「知其力之所可及―吾知其力之所可及」「寛平之年―寛平元年」。

［訳］　河の霧

道があればよいなあ。霧で迷ったその昔、あの神が現われた跡を知り、神の教えに導かれた、川波の立つ賀茂（のように）。

本朝神社考が引用する寛平御記によると、宇多天皇がまだ天皇の位に就く前、王の侍従と呼ばれていた時、鷹を放って賀茂のあたりで狩りをなさった。急に空が陰り霧が立ちこめ、あたりの道に迷い、帝は藪の中にひそみ隠れて、非常に憂え恐れられた。一人の老人が来て、「私はこのあたりに住む老翁だ。春にはすでに祭があり、冬には祭が一度も無い。願わくは冬の祭を賜りたい」と告げた。帝は（その翁が）賀茂の明神だと気づいた。そこで老人に答えて、「私の力でできると（私は）知っている。願わくは自重して軽率なことをしないように」と言った。翁はそう言い終えると消えてしまい、帝はこれを大変不思議なことだと思った。それからまもなく、仁和三年八月二十六日に（王の侍従は）皇太子になり、その日の内に天皇の位に就いた。これにより（帝は）神の言葉を信じ、寛平の年の十一月二十一日に初めて賀茂の臨時祭を行った云々。

［考察］出典は賀茂の臨時祭の由来を記したもの。当歌は「道」に通り道と神仏が示した教え、「其かみ」（その頃の意）に「その神」、「しるべ」（導きの意）に「知る」を掛ける。

（加藤森平）

雁

234 秋はまた南に雁のかへる山都ををのかとこよとやおもふ

漢武帝、秋風辞。秋風起テ兮白雲飛ヒ、草木黄落テ兮雁南ニ帰ル。

［出典］雪玉集、三六九八番。古文真宝後集、巻一、一〇頁。［異同］『新編国歌大観』『古文真宝後集』ナシ。

［訳］　雁

秋にはまた雁が（毎年のように）南に帰る山があり、都を自分の（故郷である）常世の国だと思っているのだろうか。

漢武帝、秋風の辞。秋風が吹き起って白雲が飛び、草木の葉は黄ばみ散り、北地の雁が南に帰る（季節となった）。

［考察］「秋風辞」は、漢の武帝が地の神を祭るために河東（山西省）の汾陰に行幸した時の作。雁は秋に北方から飛来し、冬を越して春に戻る渡り鳥。当歌の「常世（とこよ）」は「常世の国」の略で、海のかなたにある不老不死の国を指し、雁の故郷と見なされた。例歌「常世いでて旅の空なる雁がねも列におくれぬほどぞ慰む」（源氏物語、須磨、二〇二頁）。

［参考］本文異同には元文五年（一七四〇）版『魁本大字諸儒箋解古文真宝後集』を使用。

（大杉里奈）

秋鴻次第過

235見すやその雲井をわたる雁たにもつらをみたらぬ道は有世を

格物論曰、雁ハ陽ー鳥泊ニ江ー湖洲ー渚ノ之間ニ云云。飛フコト有ニ先後行列ー秋ー南ニシテ而春ハ北ニス。

［出典］雪玉集、三〇八六番。円機活法、巻一三、雁付雁陣・雁字。［異同］『新編国歌大観』『円機活法』ナシ。

［訳］　秋の鴻、順々に過ぎる

見て思わないだろうか。あの空のかなたを渡る雁でさえも列を乱すことがない、道がある世の中だと。

格物論によると、雁は陽鳥で、川や湖の洲の水際の間に泊まる云々。飛ぶと前後に行列をなして、秋は南へ、

春は北へ飛んでいく。

［考察］歌題の「鴻」は雁の一種。

（大杉里奈）

渡雁

236秋さむしさのゝわたりのさよ時雨旅なる雁は家もあらなくに

万葉集、巻三、長ノ忌寸奥麻呂。苦毛零来雨可神之崎狭野乃渡尓家裳不有国。

［出典］雪玉集、一〇九〇番。万葉集、巻三、二六五番。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『万葉集』（寛永版）「神之崎―神之埼」。

［訳］　渡る雁

秋は寒いなあ。狭野の辺りに降る夜の時雨よ。旅をしている雁は（羽を休める）家もないのに。

万葉集、巻三、長忌寸奥麻呂。困ったことに雨が降って来たなあ。三輪の崎の佐野の渡しには（雨宿りする）家もないのに。

［考察］『万葉集』の「狭野」は、紀伊国牟婁郡（現在の和歌山県新宮市佐野）か大和三輪（奈良県桜井市三輪）か、また「わたり」の意味は渡し場か周辺か、と解釈が分かれる。

［参考］出典の和歌を本歌取りした「駒とめて袖うちはらふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮」（新古今和歌集、巻六、冬、六七一番、藤原定家）に詠まれた「佐野のわたり」は、北村季吟著『八代集抄』では「佐野渡、大和也」と注している。

（大杉里奈）

海上雁飛

237旅にして身にしむすまの波風を思ひしるにや雁も鳴らん

須磨巻云、沖より、船とものうたひの、しりてすき行なとも聞ゆ。ほのかに只ちいさき鳥のうかへると見やらるゝも、心ほそけなるに、雁のつらねてなく声、かちの音にまかへるを、打なかめたまふて、御涙のこほるゝをかきはらひたまへる云々。

［出典］雪玉集、三三三四番。源氏物語、須磨巻、二〇一頁。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『承応』『湖月抄』「すき行―こぎ行」。

［訳］　海上を雁が飛ぶ

旅をして身にしみる須磨の波風（の風情）を思い知って、雁も鳴いているのだろうか。

須磨巻によると、沖を通っていくつもの船が、大声で歌いながら通り過ぎていくのも聞こえてくる。（その船の影は）かすかで、ただ小さい鳥が浮かんでいるかのように遠くに見えるのも心細い感じがするが、雁の列を作って鳴く声が船の楫の音にそっくりであるのを、（源氏は）虚けたようにお眺めになりながら、涙がこぼれてくるのをお払いになった云々。

［考察］『源氏物語』は、須磨に自ら退去した光源氏のわび住まいの一節。

（呉慧敏）

沢畔鳴

238柏 春の水みちてし程やくらへまし鳴立沢のふかきあはれに

陶潜、四時詩。春水満四沢。

［出典］該当歌ナシ。古文真宝前集、第一巻、二九頁。［異同］『魁本大字諸儒箋解古文真宝前集』ナシ。

［訳］　沢畔の鳴

春の水が満ちてきた頃と比べてみようか。鳴の飛び立つ水辺の深い寂しさを。

陶潜、四時詩。春には水が四方の沢に満ちる。

［考察］出典の漢詩については116番歌の解説、参照。「鳴立つ沢」は鳴の飛び立つ水辺、または鳴の立っている水辺。西行の名歌「心なき身にもあはれはしられけり鳴立つ沢の秋の夕暮」（新古今和歌集、秋上、三六二番）は、北村季吟著『八代集抄』では「師説」として「此鳴の飛立沢辺」と解釈する。

（呉慧敏）

月下擣衣

239白妙の月のきぬたや七夕の手にもをとらぬ物とうつらん

帚木巻云、立田姫といはんにもつきなからす、たなはたの手にもをとるましく云々。

［出典］雪玉集、一三九一番。源氏物語、帚木巻、七六頁。

［異同］『新編国歌大観』「をとらぬ―とられぬ」。『承応』『湖月抄』ナシ。

［訳］　月下の擣衣

白く輝く月の下で、七夕姫の技にも劣らない布を砧（きぬた）で打っているのだろうか。

帚木巻によると、（染物の腕前は）竜田姫といっても不似合いでなく、（仕立物のほうも）たなばた姫にも劣らぬくらいで云々。

［考察］歌題の「月下」は月の光のさす所、「擣衣」は布を柔らかくして、つやを出すため、砧（木製または石の台）に載せて木槌（きづち）で布を打つこと。『源氏物語』は雨夜の品定めの一節で、左馬頭が染色の名人であった妻を竜田姫になぞらえている。竜田姫は竜田山を彩る紅葉の美しさから、葉を赤く染める女神として染色が得意とされた。七夕姫は機織りの名手で、裁縫にも優れる。

［参考］秋月と砧の組み合わせは、漢詩文で定着。例、「誰家思婦秋擣帛、月苦風凄砧杵悲。八月九月正長夜、千声万声無了時。応到天明頭尽白、一声添得一茎糸。」（白氏文集、巻一九、聞夜砧）。

（呉慧敏）

近擣衣

240 柏 衣うつわさもさこそと思ふ夜になを身のうへを賤か声々

［出典］柏玉集、九五九番、二〇五五番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　近所の擣衣

（砧で）衣を打つありさまもそのようであろう、と思う夜に、依然として身の上を（語る）身分の低い人の声がするなあ。

［考察］漢詩文や和歌で詠まれる「擣衣」（解説は239番歌、参照）と、庶民の身の上話との組み合わせについては241番歌の出典を参照。

（竹田有佳）

隣擣衣

241月はなをうつや衣の色にたにひかりやそへん夕かほの宿

夕皃巻云、となりの家〳〵、あやしき賤の男の声〳〵、めさまして、「あはれ、いとさむしや」云々。しろたへの衣うつきぬたの音も、かすかに、こなたかなた聞わたされ。

［出典］柏玉集、九六〇番、二三五〇番。雪玉集、四七四四番。源氏物語、夕顔、一五五頁、一五六頁。

［異同］『新編国歌大観』「夕かほ―夕かげ」（柏玉集、二三五〇番。雪玉集、四七四四番）。『承応』『湖月抄』ナシ。

［訳］　隣の擣衣

月は、なおも砧で打っている衣の色に、せめてつやを添えるのであろうか。夕顔の宿で。

夕顔巻によると、隣近所の家々では、身分の低い男たちが目をさまして、声々に「ああ、まったく寒いなあ」云々。布を打つ砧の音も、かすかに、あちらこちら一帯に聞こえて。

［考察］『源氏物語』は、光源氏が夕顔の家に泊まった翌朝、耳にした状況。当歌の下の句は、「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」（『源氏物語』夕顔の巻、一四〇頁）に似る。

（竹田有佳）

242笛竹のむかしをおもふ声ならて聞わひよともうつ衣かな

文選。思―旧ノ賦ノ序ニ曰、余―逝テ将ニ西ニ邁ント、経ニ其ノ旧―廬ヲ。于レ時日薄リ虞―渕ニ、寒―冰凄―然タリ。隣―人有ニ吹レ笛者一、発レ声寥―亮。追テ思ニ曩―昔遊一宴ノ之好一ヲ。感シテ音ヲ而歎云云。

［出典］雪玉集、四七四五番。文選、巻一六、思旧賦、二〇六頁。［異同］『新編国歌大観』『文選』ナシ。

［訳］　（隣の擣衣）

（思旧賦のように）昔を思い出す楽器の音色でもないのに、聞いて思い歎けとも（いわんばかりに）衣を打つ（音が聞こえる）なあ。

文選。思旧賦の序によると、私は西の洛陽に旅立ち、（その帰路、）嵇康の旧居に立ち寄った。時に日は沈みかけ、氷が寒々と張り詰めていた。近隣に笛を吹くものがいるらしく、澄み切った音色が響いてきた。私は昔の友との宴遊を思い起こし、笛の音に感じて嘆息した云々。

［考察］「思旧賦」は、竹林の七賢人にも数えられる向秀が、嵇康や呂安との交遊を懐かしみ、刑死した彼らを悼んだ賦。

（竹田有佳）

243朝さむに誰あたゝめて味酒のみむろの霧の山路行らん

三笠山（秋）

万葉集、十一巻。味酒（アチサケノ）三毛侶（ミモロノ）乃山尓立月之見（ノミカ）我欲君（ホリキミカ）我馬（ムマノ）之足音（アシヲト）曽為（ソスル）。

［出典］雪玉集、五一二九番。万葉集、巻一一、二五一二番。

［異同］『新編国歌大観』「三笠山（秋）—三室」。『万葉集』「味酒（アチサケノ）—味酒之（ウマサカノ）」「見我欲君我馬（ミカホリキミカムマ）—見我欲君我馬（ミカホキワカウマ）」。

［訳］　秋の三笠山

（秋の）寒い朝に、誰がうまい酒を温めて飲み（体を温めて）、三室の霧が立ちこめる山路を行くのだろうか。

万葉集、十一巻。三諸の山に出る月を待ちわびるように、会いたいあなたの馬の足音が聞こえてきたなあ。

［考察］『万葉集』は、男の来訪を待ちわびる女の相聞歌で作者未詳。歌題の三笠山は奈良市の東方、春日山連山の一つ。異同の「三室」も『万葉集』の「三諸」も、神が降臨する場所という意味。中でも神奈備山や三輪山は「三室山」と呼ばれた。「味酒の」は枕詞で、「三室」「三諸」「三輪」に掛かる。当歌は「味酒のみむろ」に「味酒飲み」（「味酒」は美酒という意）を掛ける。

［参考］『万葉集』の異同には、寛永二〇年（一六四三）版を使用。

（平石岳）

九月九日

244にきはへる民の烟の秋をみん高きにのぼるけふを待えて

事文類聚曰、汝ー南ノ桓景隨二費長房一遊ー学スルコトー累ー年。長房謂レ景、「九月九日、汝カ家、当ニ有二災厄一。急宜レク去。令レシテ家ヲ各作二縫ー嚢ヲ一、盛二茱ー萸一以繫レ臂登二高山一飲マハ二菊酒一ヲ、此ノ禍可レ消」。景如レク言挙レ家登ルレ山ニ。夕ニ還レハ鶏犬牛ー羊、一ー時ニ暴ー死ス。

［出典］雪玉集、一四一二番。事文類聚前集、天時部、重陽、登高避厄。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『事文類聚』「令家各作―令家多作」「登高山―登高」「飲菊酒―飲菊花酒」「鶏犬牛羊―見鶏狗牛羊」。

［訳］　九月九日

盛んに民の（竈から）炊煙が立つ秋（の景色）を見よう。高いところに登る今日の日を待ち迎えて。

事文類聚によると、汝南の桓景は、費長房に従って何年も遊学していた。費長房は桓景に、「九月九日、お前の家は災難に見舞われるに違いない。急いでここを立ち去（り帰宅す）るがよい。家人おのおのに、縫いあげた袋を作らせて、茱萸（グミの木）の実を入れ、腕にくくりつけ、高い山に登って菊酒を飲めば、この禍は消えるだろう」と言った。桓景は言われた通りに、家人こぞって山に登った。夕方になって家に帰ると、鶏、犬、牛、羊は一度に急死していた。

［考察］『事文類聚』は重陽の節句（九月九日）に、山に登り菊酒を飲む風習の起源を述べたもの。当歌は日本の国見歌「高き屋に登りて見れば煙立つ民のかまどはにぎはひにけり」（新古今和歌集、巻七、賀歌、七〇七番、仁徳帝）も踏まえる。

（平石岳）

重陽宴

245長月やけふたまふ氷魚のよるとてや雲井にあかすめくる盃

重陽宴。公事根源云、十月の旬のみにあらす、こと日も氷魚をたまふ例あり。又、群臣に菊酒をたまはる。大かたは五月の節会におなし云々。

［出典］雪玉集、七八四一番。公事根源、九月、重陽宴。［異同］『新編国歌大観』『公事根源集釈』ナシ。

［訳］　九月九日の宴

九月の今日、賜った氷魚が寄るではないが、夜に宮中の宴で飽きることなく巡る盃であるなあ。

重陽の宴。公事根源によると、十月（一日）の旬儀だけではなく、他の日にも氷魚を賜る前例がある。また、

臣下たちに菊酒をお与えになる。大体のことは五月の節会と同じである云々。

［考察］『公事根源』は応永三〇年（一四二三）頃に、一条兼良が著わした有職故実に関する書。引用個所は、宮中で行なわれる年中行事のうち、九月九日の重陽の節句に関する個所。「氷魚（ひを）」は鮎の稚魚で秋から冬にかけて捕れ、十月一日に宮中で催される孟冬の旬において下賜された。当歌の「よる」は「夜」と「寄る」の掛詞。氷魚は網代に寄るものとして、和歌によく詠まれた。

［参考］本文異同には松下見林が注した元禄七年（一六九四）版『公事根源集釈』を使用。

（廣瀬薫）

白菊

246 糸をたに染るはかなし秋の菊心にもあらで色やかはらん

淮南子曰、墨子見二練絲一而泣ㇾ之、為下其可二以テ黄一ニス、可中以テ墨上ニス云云。

［出典］雪玉集、一四一〇番。淮南子、巻一七、説林訓、一〇一五頁。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『淮南鴻烈解』「可以墨―可以黒」。

［訳］　白菊

白い糸をさえ染めるのは悲しいことだ。秋の白菊は（色を変えたくない）本心とは違って色が変わるのだろうか。

淮南子によると、墨子が練り糸（白く柔らかい絹糸）を見て泣いたのは、その色を黄色にも黒にもできるためである云々。

［考察］出典は戦国時代ごろの思想家であった墨子が、白く柔らかい絹糸を黄色にも黒にも染めることが選べるよう

に、どれを選ぶかによって物事は全く違う結果となるため、その選択には慎重を期すべきであると述べた個所。また白菊は、霜にあたると花びらの先が赤紫に変色するが、その美しさを王朝人は賞賛する一方、心変わりを連想させるものとして和歌に詠んだ。例「色かはる秋の菊をば一年に二たび匂ふ花とこそ見れ」（古今和歌集、秋下、二七八番、読人知らず）、「白菊のうつろひゆくぞあはれなるかくしつつこそ人もかれしか」（後拾遺和歌集、秋下、三五五番、良暹法師）。

［参考］本文異同には、寛文四年（一六六四）版『淮南鴻烈解』を使用。また『蒙求』にも同文が見られる。

（廣瀬薫）

翫宮庭菊

247雲のうへに時雨もしらし秋の菊野の宮人のうふるためしに

順家集云、貞元元年の九月、斎宮、野宮に前栽うへて、またよむ。

新古今、雑部入

たのもしな野の宮人のうふる菊しくるゝ月にあへすなるとも

［出典］雪玉集、一四二五番。順家集、二五七番。新古今和歌集、巻一六、雑上、一五七六番。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『歌仙家集』「貞元元年の―同年の」「うふる菊―うふる花」「あへす―あへす」。

［訳］　宮の庭の菊を翫ぶ

宮中で時雨も知らない秋の菊（が咲いているなあ）。昔、野宮の人が植えた先例のように。

源順の私家集によると、貞元元年の九月、斎宮が野宮の庭に草木を植えて、また歌を詠む。

新古今和歌集、雑部に入集

頼もしいことだなあ。野宮の人が植える菊の花よ。時雨の降る十月に、耐えられないことになろうとも。

［考察］源順の和歌は、斎宮が潔斎する野宮（ののみや）に新しく植えられた草木の頼もしさを称え、斎宮の永久の栄華を祝ったもの。それを前例として当歌は、天皇の治世の繁栄を寿ぐ。

［参考］『歌仙家集』は正保四年（一六四七）版を使用。この斎宮は村上天皇の第四皇女規子内親王で、貞元元年（九七六）九月二一日に野宮に籠もった。

（廣瀬薫）

閑庭菊

248もみち葉もわくる跡なきさひしさをねたましかほの庭の白菊

帚木巻云、「庭の紅葉こそ、ふみ分たる跡もなけれ」なと、ねたます。菊を折て云々。

遊仙窟曰、故故将（ネタマシカホニ）二織（キ）手（ヲ）一時々弄（ヨリ〳〵ツマナラス）二小（ヲ）一緒（ヲ）。

［出典］雪玉集、一四一六番。源氏物語、帚木巻、七九頁。遊仙窟。

［異同］『新編国歌大観』『承応』『湖月抄』ナシ。『遊仙窟』（江戸初期無刊記本）「小緒―小絃」。

［訳］　人けのない庭の菊

紅葉の落ち葉を踏み分けて出入りした形跡もない心細さを、妬ましく思わせるような庭の白菊だなあ。

帚木の巻によると、「庭の紅葉には、人の踏み分けてきた跡もないね」などと言って、相手を悔しがらせる。菊を折り取って云々。

遊仙窟によると、妬ましく思わせるように、細指で折々に琴糸を鳴らす。

［考察］『源氏物語』は、ある殿上人が琴を弾く恋人に向かって、他の男の訪れが無いことをからかう場面。張鷟（ちょうさく）の『遊仙窟』は唐代の伝奇小説で、『万葉集』や『源氏物語』など日本文学に多大な影響を与えた。

（加藤森平）

対菊延齢

249 秋のきく花の光もほしの名の老ぬる人のうへにこそ見め　柏

活法、星部曰、狼比地有二火星一。曰二南一極老一人星一云云。

晋、天文志。南一極、常二以二秋一分之旦一見レ于丙一、春一分ノ之夕一没ス于丁一。見ル時ハ則治一平主ニ寿昌ヲ一。

［出典］柏玉集、九八二番、一九五八番。円機活法、天文門、星、老人星。晋書、志、天文。

［異同］『新編国歌大観』「花の光も―花の光に」（一九五八番）。『円機活法』「火星―大星」。『晋書』「于丙―于景」「夕没―夕而没」。

［訳］　菊に対して寿命を延ばす

秋の菊の花の輝きも（治平と長寿を司る）南極老人星の光のようで、老いた人の身の上に（重ねて）見よう。

円機活法の星の部によると、天狼星の近くに火星がある。南極老人星という云々。

晋書の天文志。南極老人星は常に秋分の朝には南南東微南に見え、春分の夕方には南南西微南に沈む。この星が見える時には世は平和で、人は長生きして栄える。

［考察］南極老人星は龍骨座のアルファ星カノープスのこと。古来中国ではこの星の見える時は天下太平、見えない時には戦乱が起こるという。南極老人とは七福神の一つで、長寿と福禄をもたらす福禄寿の異称。天狼星は大犬座

のアルファ星シリウスの中国名。丙と丁は十干五行説で方角を示す。「老いぬる人」（年老いた人）に「南極老人星」の意を掛ける。

［参考］「久方の雲のうへにて見る菊は天つ星とぞあやまたれける」（古今和歌集、秋下、二六九番、としゆきの朝臣）では、菊を空の星に重ねて見る。「濡れてほす山路の菊の露のまにいつか千年を我は経にける」（古今和歌集、秋下、二七三番、素性法師）では、菊は中国の菊水の故事から不老長寿を約束するものとして詠まれる。『晋書』の本文異同には元禄一四年（一七〇一）版を使用。

（加藤森平）

名所菊花

250道のくは名にのみ菊の花も只都の秋のしほかまのうら

いせ物語云、むかし、左のおほいまうちきみ、いまそかりけり。かも川のほとりに、六条わたりに、家をいと面白くつくりて、住給ひけり。神無月の晦日かた、菊の花うつろひ盛なるに、下略。しほかまにいつかきにけむ—

［出典］雪玉集、一四二三番、六二二七番。伊勢物語、八一段。［異同］『新編国歌大観』『伊勢物語』ナシ。

［訳］　名所の菊花

陸奥の国は（行ったことがなく）評判だけ聞くが、菊の花もまるで都に造られた秋の塩竈の浦（で咲いていたように盛り）だなあ。

伊勢物語によると、昔、左大臣がいらっしゃった。賀茂河のほとり、六条辺りに、家をたいそう趣深く造っ

て、お住みになった。十月の末ごろ、白菊の花が薄紅色に変わり美しさが盛りであるときに、下略。（都から遠い）塩竈に、いつ来てしまったのだろうか。朝凪の中、海で釣をする船は、この浦に寄ってきてほしい。（そうすれば、ますます風趣が加わるだろうから。）

［考察］『伊勢物語』の「塩竈」は、宮城県の松島湾内にある名所。「おほいまうちぎみ」（左大臣源融。生没八二二～八九五年）は、塩竈の景色を模して邸内に庭園を作らせた。「菊の花うつろひ盛なる」の解釈については、246番歌の［考察］参照。当歌は「菊」に「聞く」を掛ける。

［参考］注釈に引用された和歌の全文は、「塩竈にいつか来にけむ朝なぎに釣する船はここに寄らなむ」。

（大杉里奈）

菊副齢

251八千とせの秋をよはひの玉椿契りか置し霜のしら菊

荘子曰、有二大椿一云者。以二八千歳一為レ春、以二八千歳一為レ秋。

［出典］雪玉集、一四二九番。荘子、内篇、逍遙游第一。

［異同］『新編国歌大観』「菊副齢―菊制齢」。『荘子』ナシ。

［訳］　菊が年齢を副（そ）える

ひと秋を八千年の寿命とする玉椿は、（長寿を）誓い合ったのだろうか、霜が降りた白菊と。

荘子によると、大椿という木があり、八千年を春、八千年を秋とした。

［考察］「大椿」は中国古代の伝説上の大木の名で、その一年は人間界の三万二千年に当たるという。当歌の「契りか

置きし」に、「契り置く」と霜が「置く」とを掛ける。歌題の「菊副齢」は菊が寿命を増したという意味で、それは大椿のお蔭かと詠む。

（大杉里奈）

谷菊

252谷風に香をとめくれは花をあらふかけ浅からぬ菊のした水

紀納言。谷―水洗レ花ヲ。汲ンテ下―流ヲ而得タル上―寿ヲ者ノ世―余―家。

［出典］雪玉集、一四一八番。和漢朗詠集、巻上、秋、九日付菊、二六四番。

［異同］『新編国歌大観』『和漢朗詠集註』ナシ。

［訳］　谷の菊

谷風が運ぶ香りを尋ねて来ると、川に洗われた菊の花が水面に映り、花の下を深く川が流れていくなあ。

紀長谷雄。酈県の甘谷を流れる川は、山中の菊の花を洗って流れる。下流付近でその流れを汲み飲料水にするおかげで、三十余軒の家の人々が百三十歳まで生きられる。

［考察］紀納言は漢学者である紀長谷雄（生没八四五～九一二年）の通称。253番歌に引かれる酈県は、河南省南陽市の西北の地域。「上寿」についても253番歌、参照。

（大杉里奈）

菊

253柏つもりては渕も浅しや名にしおふなかれを菊の花のうへの露

事文類聚後集。二十七曰、南陽郡ノ酈縣有二甘谷一水甘美ナリ。其山上三有二大菊一落水従二山下一流得二其ノ滋液一。谷中有二三十余家一不二復穿レ井、仰飲二此ノ水ヲ一。上寿ハ百二三十、其ノ中年モ亦七八十云云。

［出典］柏玉集、九七二番、一二五七番。雪玉集、四五五八番。古今事文類聚後集、巻二九、花卉部、菊花。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『新編古今事文類聚』「巻二七―巻二九」「其山上―云其山上」「三十余家―三千余家」「其中年―中年」。

［訳］　菊

年月が積み重なるにつれ土砂が積もり積もっては、淵も浅くなるなあ。菊の花の上に宿る露から生じた、有名な流れだと聞くが。

事文類聚後集。巻二十七によると、南陽郡の酈縣には甘谷という所があり、水が甘美である。その山の上にある大きな菊花が水に落ち、山の下から流れて、川に菊花のエキスが流れ込む。谷の中に住む三十余軒の家は井戸を掘らず、川の水を頼って飲んでいる。もっとも長生きする者は百二三十歳、中程度の者も七八十歳（まで生きられる）云々。

［考察］当歌は「積もり」に年月が積もると土砂が積もる、「菊」に「聞く」を掛ける。

［参考］本文異同には、寛文六年（一六六六）版『新編古今事文類聚』を使用。

（呉慧敏）

移座就菊叢

254白妙の袖かと見つゝ来し物を菊の垣根そ立もさられぬ

南史。渕明九月九日、無レ酒坐二籬一辺叢中一二摘レ菊盈レ杷二而坐久之望二見白衣ノ人ノ至一ルヲ。太守王一弘送レ酒、飲酔而帰云云。

［出典］雪玉集、三〇九八番。南史、巻七五、隠逸上、陶潜。

［異同］『新編国歌大観』ナシ。『南史』「渕明—嘗」「坐籬辺—出宅辺」「叢中摘菊盈杷而—菊叢中」「望見白衣人至—ナシ」「太守王弘—逢弘」「送酒—送酒至」「飲酔而帰—即便就酌酔而後帰」。

［訳］　座を移して菊の叢にとどまる

（酒を持ってきた人の）白い袖かと見ながら来たが、（それは白衣ではなく）白菊（でそ）の垣根を立ち去ることもできないなあ。

南史。陶淵明は（菊酒を飲む）九月九日なのに酒がなく、垣根の辺りの草むらに座り、菊の花を摘んだ。（知らないうちに）花がいっぱいになり、長い時間、座っていた。（遠くから）白い衣の人が近づいて来るのが見えた。（それは）太守の王弘が酒を送ってきたのだ。（陶淵明はその酒を）飲み酔って帰った云々。

［考察］陶淵明は東晋時代の文学者。王弘の酒を詠んだ漢詩は、「涼秋月尽早霜初。殘菊白花雪不如。老眼愁看何妄想。王弘酒使便留居」（『菅家後草』「秋晩題白菊」）、白菊を白衣に見まちがう例は、「菊の花のもとにて、人の、人待てるかたをよめる。花見つつ人待つ時は白妙の袖かとのみぞあやまたれける」（古今和歌集、秋下、二七四番、紀友則）などがある。

［参考］本文異同には清朝の順治一三年（一六五六）版『南史』を使用。

（呉慧敏）

紅葉

255 柏 したもみち染る雫は松杉のあゐより出て青き色かな

筍子。見二于春部柳歌一註一。

［出典］柏玉集、九九〇番、二一五三番。雪玉集、七四一六番。

［異同］『新編国歌大観』「紅葉―紅葉二首」「かな―かは」（雪玉集）。

［訳］　紅葉

樹木の下葉を赤く染める雫（しずく）は、青々とした松や杉より生じて、さらに青い色だろうなあ。

筍子。春部、柳の歌の注に見える。（24番歌、参照）

［考察］『雪玉集』の本文では末尾が詠嘆の「かな」ではなく反語の「かは」になり、文末の訳は「さらに青い色だろうか。いや、そんなことはなかろう。」となり、雫は紅葉させるのだから青色のはずがない、と解釈される。

（呉慧敏）

256 けふ見すはにしきもいかにくらふ山やみに過なん秋のもみちは

史記。項羽本紀曰、富二貴ニシテ一不レ帰二故郷一、如二衣レ繡ヲ夜ル行一カ。誰カ知ルレ之ヲ者ナラン。

［出典］雪玉集、七四一七番。史記、項羽本紀、四六四頁。［異同］『新編国歌大観』『史記』ナシ。

［訳］　（紅葉）

暗部山（くらぶやま）の暗闇の中で盛りを過ぎてしまう秋のもみじ葉を、今日見ないならば、どのように錦とも比べられようか。

史記。項羽本紀によると、富貴な身分になっても故郷に帰らないのは、錦繡を着て真暗な夜道を行くようなも

のだ。せっかくの成功・富貴を誰も知ってはくれないだろう。

［考察］『史記』項羽本紀の「衣繡」は、『漢書』項籍伝では「衣錦」で本文が異なる。「見る人もなくて散りぬる奥山の紅葉は夜の錦なりけり」（古今和歌集、秋下、二九七番、紀貫之）により「夜の錦」という歌語として定着し、無意味なこと、甲斐のないことをいう比喩表現となる。暗部山は光が射さず暗い所として有名な山。当歌は「くらぶ」に「比ぶ」を掛ける。

（竹田有佳）

山皆紅葉

257もみちはに立かくされて見し花のかたはらなりし太山木もなし

桧賀巻のこと葉、春の部に見えたり。

［出典］雪玉集、一四五四番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　全山、紅葉

紅葉にさえぎられて、春に見た桜の傍らにあった山奥の木も（見え）ない。

紅葉賀の巻の言葉は、春の部に見えている。（35番歌、参照）

［考察］35番歌に引かれた「立ち並びては、花の傍らの太山木（みやまぎ）なり。」（源氏物語）で、「花の傍らの深山木（みやまぎ）」とは、優れたもののそばにあるため、はなはだ見劣りするものの例え。49番歌、50番歌、参照。

（竹田有佳）

葛回墻

258山さとはあし垣まかき岩垣も只一むらの葛のしたかせ

催馬楽、芦垣。あしかきまかきかき分て、てふこすとおひこすと下略

［出典］雪玉集、七八三六番。催馬楽、葦垣、一四〇頁。

［異同］『新編国歌大観』「回墻―廻牆」。『催馬楽』ナシ。

［訳］　葛、垣を巡る

山里は葦垣にも籬にも岩垣にも、一群れの葛（が這い巡るばかり）で、その下を風が吹くなあ。

催馬楽、芦垣。芦垣や真垣をかき分けて、とんと越すと、（あの娘を）背負って越すと下略。

［考察］催馬楽は、夜這いをしたと噂を立てられて抗議する男の一節。葛は秋の七草の一つで、風に翻ると白い葉裏が印象的であり、また白は五行思想によると秋の色である。

［参考］本文異同には寛文八年（一六八八）版『梁塵愚案抄』（一条兼良著）を使用。

（竹田有佳）

古寺紅葉

259ゆく袖もにしきと見えて墨染の夕の寺にあまる紅葉は

重―畳ル煙嵐之断ル処、晩―寺ニ僧帰。

鈴虫の巻の詞。夕の寺に置所なけなるまて、所せきいきほひになりてなん、僧ともはかへりける。

［出典］雪玉集、三九九三番。和漢朗詠集、下、僧、六〇四番。源氏物語、鈴虫巻、三七八頁。

［異同］『新編国歌大観』『和漢朗詠集註』『承応』『湖月抄』ナシ。

［訳］　古寺の紅葉

去りゆく僧の黒衣の袖も錦のようにきらびやかに見えるほど、墨染めのような夕暮れの寺に、紅葉があふれている。

山間の幾重にも重なったもやの切れ目に、夕暮れの寺に帰る僧が見える。

鈴虫の巻の言葉。夕方になり、寺に置き所がなくなるほど、豪勢なお布施を頂いた様子で、僧たちは帰って行った。

［考察］『源氏物語』は、女三の宮の持仏開眼供養の際に、光源氏をはじめ朱雀院や今上帝からの寄進が豪勢で、寺に入りきれないほどの布施をいただき、僧たちが退出する場面。当歌は寺の周りに広がる紅葉が、僧衣の袖の上に重なり、まるで錦を着ているように見えると詠む。当歌の「墨染」は僧衣と、夕べの薄暗さを掛ける。

（平石岳）

紅葉写水

260くれなゐの木末の秋は水を染波をもそむる露しくれかな

朗詠集。染レ枝ヲ染レ浪ヲ。表裏一―入再―入ノ之紅。

［出典］雪玉集、三九〇〇番。和漢朗詠集、上、春、花付落花、一一六番。

［異同］『新編国歌大観』「紅葉写水―紅葉潟水」。『和漢朗詠集註』ナシ。

［訳］　紅葉、水に写る

梢（こずえ）が紅になる秋の九月は、（紅葉で）水も波をも染める、露や時雨（の季節）だなあ。

和漢朗詠集。（梢の桜花は）枝を（紅に）染め、水面に映って波を（紅に）染めているかのようである。その

さまは、衣の表裏を紅の染料で幾度も染め上げているようだ。

［考察］『和漢朗詠集』は菅原文時が桜花を詠った漢詩。当歌は桜を紅葉に置き換え、葉を紅葉させる露と時雨を詠む。「木末（こずえ）の秋」は九月の異称。

［参考］類歌「枝をそめ波をも染めて紅葉ばのしたてる山の滝のしら糸」（新千載和歌集、秋下、五八八番、常磐井入道前太政大臣）。

（平石岳）

雨中紅葉

261秋の雨これや錦をあらふ江のぬれて紅葉は色まさるらん

白氏六帖、見于春部。

［出典］雪玉集、三三九九番。［異同］『新編国歌大観』ナシ。

［訳］　雨の中の紅葉

秋の雨、これこそが錦を洗う川なのだなあ。（秋雨に）濡れて紅葉は色がますます濃くなっていくのだろう。

白氏六帖、春の部に見える。（46番歌、参照）

［考察］「錦をあらふ江」は、46番歌に引く「蜀ニ成ニ都ニ有ニ濯レ錦ヲ之江ニ」の「錦江」。その川で錦を洗うと色つやが増さるように、当歌は秋雨が紅葉を洗って色を増すと詠む。

（廣瀬薫）

紅葉如酔

262 碧
もみちは丶折たく人の心をやくみて千入の色にみすらむ

白氏文集。林―間ニ暖レ酒ヲ焼二紅葉ヲ一。

［出典］三玉和歌集類題、秋、紅葉如酔。白氏文集、巻一四、送王十八帰山寄題仙遊寺。

［異同］『三玉和歌集類題』「もみちは丶―紅葉丶を」「折たく―折焼」。『白氏文集』ナシ。

［訳］　紅葉が酔っているかのよう（に赤い）

紅葉の葉は、折って火にくべる人の心を察して、何度も染料につけて染めた色に見せるのだろうか。

白氏文集。林間で紅葉を燃やして酒を暖める。

［考察］『白氏文集』は、白居易が友人の王十八が帰郷するのを送り、彼の故郷にある仙遊寺の光景を詠ったもの。当歌は、紅葉が赤いのは、その枝を折って火にくべ、酒を暖め酔って顔が赤くなる人に合わせたからかと詠む。「心をくむ」の「くむ」は「酒をくむ」の縁語。「千入（ちしほ）の色」については260番歌の漢詩を参照。

［参考］『白氏文集』の漢詩は『和漢朗詠集』上、秋、秋興、二二一番にも収録され、『平家物語』や謡曲などにも多く引かれる。

（廣瀬薫）

紅葉映日

263 柏
夕日影色こきまゝにきさらきの花をもいはしみねの紅葉丶

杜牧詩。霜―葉ハ紅ナリニ於二月ノ花ヨリモ一。

［出典］三玉和歌集類題、秋、紅葉映日。三体詩、巻上、山行。

［異同］『三玉和歌集類題』「紅葉丶―蒙葉」。『三体詩』ナシ。

［訳］　紅葉が日に映える

峰の紅葉は夕日に映えて色が濃いのにまかせて、二月の（赤い）花のことも言うまい。

杜牧の詩。晩秋の霜に染まった楓樹の葉は、春の盛りに咲く花よりも、さらに深紅に輝いている。

［考察］『三体詩』は宋末の周弼の撰。唐の詩人百六十七家の近体詩を、七言絶句・七言律・五言律の三体に分類して収めたもの。杜牧の詩も当歌も紅葉を春の花より赤いと詠むが、紅葉させたものとして杜牧は霜、当歌は夕日を取り上げる。

［参考］本文異同には元禄一六年（一七〇三）版を使用。異同に挙げた「蒙」はモミチと読み、紅葉の意。

（加藤森平）

鐘声送秋

264 同 ゆく秋に舟も車も何ならしかねははるかに送る声かな

菅丞相。送レ二春ヲ一不レ用レ動二舟―車一ヲ。

［出典］柏玉集、一〇二六番、一九六〇番。和漢朗詠集、春、三月尽、五三番。

［異同］『新編国歌大観』「鐘声送秋―鐘声遣秋」（一〇二六番）「何ならし―なにならで」（一九六〇番）。『和漢朗詠集註』ナシ。

［訳］　鐘の音が秋を送る

過ぎ去る秋を送るのに、舟も車も何の役にも立たないだろう。鐘の音が、遥か遠くに去っていく秋を見送っている

なあ。

菅原道真大臣。行く春を送るのに、舟や車といった乗物を用意してやる必要もないことだ。

［考察］道真の漢詩は、「唯別残鶯与落花」（春は鶯の鳴き声と散る花に送られて過ぎる）と続く。

（加藤森平）